
この憂き世に注ぐ一条の光が有るなら。

石室悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この憂き世に注ぐ一条の光が有るなら。

【Nコード】

N9896H

【作者名】

石室悠

【あらすじ】

僕には、矢が見える。刺さる者に必ず死を告げる、光の矢が。そして僕はそれでも、平凡な日々を過ごしている。

1 いつものこと

その日もいつもの通り出社するため、八時きっかりには家を出た。

特にブランド物というわけでもないスーツ、革靴にショルダーバッグという姿。サラリーマンとして埋没した姿で、僕は団地の道をしゃきしゃき歩いて行く。

それがビジネスマンとして正しい姿勢だからそうしているが、休みの日は背中を丸めているし、こんなに早く歩かない。だが今日は出勤日だ。スーツを着てネクタイを締めた時から、自分はサラリーマンなのだと言いつけ、そのキャラクターを作らないと、どうにも会社に行く気がしない。だからとびきりサラリーマンらしい格好をする。

この小さな団地にマイホームというのを建ててもらったのは一八年も前の事で、その頃はまだこの辺りに家は数えるほどしか無かった。だが今となっては道路以外は全部家、四方八方家だらけだ。示し合わせたように、二階建ての洋風の家がずらずら並んで、何と云うか生活感が無い。ジオラマのほうがもっと現実的だ。

似たような家と庭、似たような車に似たような風景、家族。まったく平均的過ぎて現実感が無い。時々個性でも狙っているのか、狭い庭で狂ったようにガーデニングしていたりもするが、それはかえって「無理をする事はないのに」という痛々しい気持ちを抱かせる。まあ彼らは誰がどう思おうと、どうでもいいのだろう。それが必要だと思っているから、飾るのだ。価値観の違いを云々言っても仕方が無い。

僕はまったくいつものようにバス停に向かい、キヤアキヤアと騒がしい女子高生の後ろに並んだ。どうやら昨日の恋愛ドラマの話で盛り上がっているらしい。フィクションの恋愛事情でこれだけ楽しめるんだから、「女の子」は幸せな生き物だな、と感心しながら、彼女達から少し距離を取る。

このご時勢、女子高生の近くに居るだけで痴漢候補だ。だから僕は彼女達から離れていたし、そこに割り込んで入って来そうなオバサンの事もただ黙って見ていた。

バスは団地を出発するものだから、席は必ず取れる。だから順番にこだわる必要は無いのだ。だのにオバサンも女子高生も、まして自分さえもこうして並んでいる理由は良く判らない。並んだからなんだ、と時々思っけれど、だからといってどうするわけでもない。

しばらくぼうつとしていると、ふいに空から光が差した。空を見上げると雲の隙間から光がこちらを差している。眩しいほどの光の中に、僕は今日もそれを見つけた。

黄金に輝く、無数の矢だ。

光を放つそれは恐ろしい程の速度で、地上めがけて降ってくる。こちらに来るのは一本だ。僕はそれをただぼうつと見ていた。矢は音も立てずに飛び、そして女子高生の一人にぐっさりと刺さった。彼女は気付いた様子もなく、けらけらと友人と笑いあっている。

ああ、ご愁傷様。

僕は心の中で手を合わせたが、それだけだった。彼女に「三日以内に死ぬよ」と言ったところで耳を貸すはずはないし、僕に出来る

事はただ手を合わせる事だけだった。それも心の中でだけで。なにしろ急に拝みだすなんて、サラリーマンのする事ではない。彼女にも何も言わないままバスに乗り込んで、そしてシヨルダーバッグを抱えると貴重な睡眠時間を取る事にした。

彼女の生き死にはともかく、僕は会社できちんと仕事をするために、休息を必要としていたのだった。

この憂き世に注ぐ一条の光が有るなら。

僕は自分の名前があまり好きではない。だから人にもあまり名乗らない。人も僕が名前の事を好いていない事が判るらしく（いや知らないうちに露骨に嫌な顔でもしているのかもしれない）親友でさえ僕を佐藤と名字で呼ぶ。佐藤。いいじゃないか、ありふれた感じで。それがとても落ち着く。

毎朝仕事のために、団地からバスで一時間ほどの街中に出る。終点だから安心して昼寝も出来る。ICカードを翳してバスを降りな

がら、未だにけらけら笑っている女子高生の背中から生えた矢を見た。

金色のそれはそれは綺麗な矢だ。西洋風のそれは僕以外の人間には見えないらしい。でも僕には物心ついた時から見えていたし、あまりに当たり前の光景だったので、長い間自分が異常なのだという事に気付かなかった。

あの矢は光と共に降って来る。雲の隙間から光が差すと、そこからヒュッと飛ぶのだ。そしてトスンと誰かに刺さる。刺さると人は大抵、三日以内に何かの形で死ぬ。それだけだ。

死神が見えるとか、死相が見えるとか、そういうのならまだ対処のしようも有るだろう。でも空から金の矢が降って来て、刺さったから死ぬなんて、誰に説明したら納得してくれるだろう？　だがこれは本当の事だ。僕だけは知っている。

真剣に相談したら変な奴に思われそうだったので、学生時代に「そういう漫画を書こうと思って」と友人に説明した。大層博識な友人は、ギリシア神話に良く似た話が有ると自慢げに言ってくれた。アポロンの光の矢だ。

ギリシア神話の中では、雲の隙間から差した光は、太陽神アポロンが光の矢を放ったものだと言われているらしい。光の矢はそこに居る人間を殺すために放つんだそうだ。だとしたらギリシアでは毎日山ほど人が死んでる事になる、と友人は笑っていた。

だが事実、毎日山ほど人は死んでいる。空を見上げると数秒に一回は矢が飛んでいるのが見えた。幸いまだ僕に刺さってくる様子は無い。長年の勘は僕に「その時」を告げない。はつきりと、身内が

標的にされた時はそうだと判った。祖父や祖母、そして母が死んだ時、僕にはそれがはつきりと判った。だからこそ「その時」でないと確信して、今では隣に降つて来ても驚きはしなくなった。慣れというのは実に怖い。それに仮に刺さったとしても、僕には改めてすべき事など無い。

いつも通りタイムカードを押して、デスクに着く。質素な机の上には付箋のついた書類が山積みになっていて、すぐに鞆を置くとパソコンの電源を入れた。そうしてパソコンが起動するまでの間、椅子に腰掛けて一度辺りを見渡す。

そう広くはない部署だ。会社は四階建てで、オフィス街に紛れている。一階はロビーで、二階は企画部。四階はお偉いさん達のオフィスで、そしてここ三階は雑用だと僕は認識している。毎日毎日、データをパソコンで入力するだけの仕事を、僕は気に入っていた。

毎日何も変わらない。素晴らしい事じゃあないか。そう言い聞かせて毎日、ドライアイ用の目薬を点眼する。実際何も変わらない事はとても幸せな事だ。なのにそれさえ退屈だと感じるなんて、これでは人間は一生かかっても幸せになれないな、と思う。だから僕は必死で、自分は今幸せだと言い聞かせる。そうしている間、僕は確かにこの世で一番幸せだ。

雑用部署の人数は三〇人近い。それぞれ机を向かい合わせて列を作り、少し離れた所に僕等よりほんの少し偉いおじさん、つまり課長が座っている、実にありふれたオフィスだ。僕は幸いにも列の一番端で、課長から一番遠い。要するに、一番あてにされていない。

それで良いと思う。

所詮皆死んでしまうのに、名誉も出世も大事にするような物じゃあない。けれどお金が無いと死ぬのが早くなるから、皆仕方無く働いているのだ。他の人に意見を聞いた事は無いが、きつと皆そう思っている。自分で嘘を吐いているだけだろう。働く事は素晴らしい、そりゃそうだ。でもどうせなら働かないで生きていきたいだろう？きつと皆「そりゃあそうだけど」と頷く。何が「そうだけど」だ。

厳密に言えば死ぬという事は僕達にとって大した問題ではない。何しろ死んだ本人は（それこそ昔から言われている通り、幽霊や神や天国地獄が無いと仮定するなら）自分が死んだ事になんて気付けない。だから死ぬ事がこんなに怖いのはおかしい。

恐らく僕みたいに死生観が無茶苦茶になった無気力な人間を作り出さないように、怖い物とを感じるようにしてあるんだろう。もし死ぬ事が気持ち良かったなら皆喜んで死ぬに違いない。本当は生きているのにうんざりしていて、ただ死ぬのが怖いから生きているのだ。少なくとも僕はそう思う。

パソコンが起動した。僕は隣の井沢君とは違うから、仕事にこっそりエロサイトにアクセスしたりする馬鹿な社員ではない。今時、上司にパソコン画面をチェックされていないと信じている、この幸せな機械オンチの事は嫌いではない。どうせ皆死ぬのに、特別好いたり嫌ったりしても仕方無い。

だから井沢君が時々つついてきて、そりゃあ猥らかな外人の写真を見せてきても、笑って妙におどけたポーズをして見せて、くすくす笑い合う。そういう時間は確かに楽しいし、憂鬱な気持ちを忘れていく。だからこの幸せな井沢君と一緒に居る事は嫌いじゃない。

向かいの席は中村さんだ。僕は女の人を「君」と呼ぶのにどうも慣れない。だから名前は会社では呼ばない事にしている。このころセクハラ問題が厳しくて、何をどうしたらセクハラになるかさっぱり判らない。だから三六にもなつて恋人も居ないという、そりゃあO.Lよりは、女流相撲取りになつたほうがいいんじゃないかと思うような中村さんにも、遠慮して接している。

中村さんは体と同じぐらい膨張した巻き髪を揺らしながら、にっこり挨拶してくる。根はいい人だが、どうにも見た目がよろしく無いので、婚期は遅れに遅れているようだ。けれど風の噂によれば、彼女には息子が居るらしい。だとしたらシングルマザーで頑張っているのかもしれない。

そう思うと中村さんのミニスカートから生えている、パンプスを履いているというよりは、黒い物がくつついているような足も健気に見えてくるものだから不思議だ。だから僕は中村さんの事も嫌いではない。

今日もこの職場の誰にも矢が刺さっていない事を確認して、一番上に積んである書類を手を取った。もし死ぬ人が居るなら、大変だ。仕事は回ってくるし、何人か代表してお葬式にも行かなければならない。そうなるとスケジュールが滅茶苦茶になつて、忙しくなる。そうなる事を事前に知っていれば、少なくとも僕は僕なりに頑張れる。

僕にとって他人の生死とはあくまでそんなものに過ぎなかった。人がどんな死生観を抱いているのか知らないが、極論して皆この程度なんじゃないかとは思っている。

なにしろ生きている間に親に優しくする子供は滅多に居ないし、パチンコ屋に行くためなら人を殺したって良い世の中だ。良い事では今でもないが、そうする人間達が現れてきたという事は、きっとそう思っているだけでやらない人は、もっともつと居る。そういうものだ。

だから僕がこういうドライな死生観を抱いている事を、誰も咎められないはずだ。なのに僕と付き合った何人かの女性は、僕の事を薄情だと罵った。彼女達の事も嫌いではない。嫌っても仕方無い。僕を薄情と罵るわりに、彼女達は平気で可愛いからと子犬を飼ったり、マナーだからと去勢したりする。他の命から生殖の権利を奪い取る事が礼儀作法だなんて、ずいぶんと優しい人達だ。

だが僕はやはり、彼女達の事も嫌いではない。そんな事を言うなら、どうせ死ぬのに毎日牛や鳥や豚やましてお米さんやキャベツさんを殺しているわけで、まったくもってきりが無い。どこかの作家だかなんだかが、それを苦に石を愛したそうだが、僕にはそこまでのパワーも無いし、餓死するような気力も無い。なにせこんな僕でも、お昼の一二時にはきつかり腹が鳴るし、どうせなら野菜よりも肉が食べたい。

結局のところ、僕は他の大勢と違う物を見て育ったのに、他の大勢と特に変わらない。それは皮肉な事で、僕は時々自嘲する。

例えば僕の授かった力が、地球の自転も変えられるようなパワーだとしても、僕は何もしなかったろうし（大体地球の自転が変えられるからなんだっていうんだ）とにかくこんな時代では、どんな特殊な力を持って生まれて来ても仕方無い。

皆才カルトを趣味で楽しむぐらいの事で、仮に僕が矢の刺さった

人にその事を忠告しても「ヤダあ」と笑ってそれで終わりだし、仮に予言が当たった事を他人が知ったなら、その人を僕が殺したんじゃないかと疑われたりする。フィクションではそういうのが良く有る。

だから僕はこの能力を活かしたり出来ない。この力が僕にくれたのは、果てしない虚しさだけだ。

僕が他の人に矢が見えていないのだと知ったのは、母が死んだ時だ。

まだあの団地にはあまり家が建っていないかった。公園が出来て、やっとバスが走り始めた頃だ。僕はまだ小学五年生で、図書室で化学の本を借りて、友達と別れてのんびり、一人山を登っていた。団地の坂は子供の足にはキツかった。僕は時々休みながら、貧弱な街路樹の坂道を上がって行く。

団地の入り口にはまだ家は無かった。ひたすら区画が存在するだけの、奇妙な場所だった。大通りには葉もまばらな街路樹が並び、街灯がぼつり、家がぼつりと有るばかりで、夜はとても外に出られないような状態じゃあない。真四角に区切られた区画だけの場所が幾つも有って、僕は漠然とそれが墓地に似ていると思った。あるいは、墓地が団地に似ているのかもしれないけれど。

夕方だった。団地の下の道では、子供達がわあわあ走って帰宅する途中で、何軒かの家では母親が洗濯物を取り入れていた。けれど団地には人影は殆ど無い。ただやたらに大きな橙色の太陽が、西へ

と傾いていて、僅かに色彩が狂っている。僕は空をキラキラ飛んでいく矢を数えたりしながら、のんびりと家へ向かっていた。

その時だ。何かとてつもなく冷たい空気が、首筋を掠めた。全身がゾクリと粟立ち、僕は「その時」が来た事を知った。はっと空を見上げると、数えていた矢の一本が、団地に落ちてくるのが見えた。それは何軒か有る家の方に飛んでいく。そっちには、我が家が有った。他の家に隠れて見えなかったけど、僕には確信が有った。

僕はランドセルをガチャガチャ言わせながら、夢中で走った。

玄関を開け、スニーカーを脱ぎ散らかしてキッチンに走りこむ。トントン包丁の音がする。母は肉じゃがを作っていて、その背中に深々と矢が刺さっていた。

その頃にはもう、矢は死を呼ぶと知っていたから（病院に行くと沢山の人に刺さっているのだ）僕はたまらず泣き出してしまった。

お母さん、死なないで。僕は泣いて矢を引き抜こうとしたけれど、それには実体無く、触る事も出来ない。しかも母には矢が見えておらず、僕が突然訳の判らない事を言い出したものだから驚いて、それから苦笑し、僕を落ち着かせようと優しく撫でた。

僕は僕なりに一生懸命伝えようとしたつもりだった。矢が刺さった。だから死んでしまつて、正しく説明した。でも母は信じてくれなかった。

そうね、でも大丈夫。母はそんな矢になんか負けないわよ、と笑った。僕はただただ泣いた。大切な事が伝わらないもどかしさ、悔しさ、悲しさ。辛かった。でも何より僕を苦しめたのは、泣き疲れ

て眠ってしまった僕を慰めようと、母が何かおいしい物を買ったために出かけた事だ。

母は最寄のスーパーに行くはずが、墓場に行ってしまった。人身事故だった。母を殺して殺人犯になってしまった中年のトラック運転手は、僕等にしきりに頭を下げて泣いたが、僕の方はあっさり彼を許すに到った。

何度も言うようだが、どんな人もいつかは必ず死ぬし、その時期も形も人それぞれなだけだ。もし思い残すような事が有るなら、それは多くの場合、そんな生き方をした事が悪いのだ。

だから僕は男手一つで二人の子供を養っているという、小太りの男を憎まなかったし、まして過酷な労働条件のせいで居眠りをしてしまった彼を、心から哀れだと思った。

どうしてこんなに頑張っている人が犯罪者にならなくてはいけないんだろう、世の中にはお金に恵まれて、苦勞の一つもしないで死んでいく幸せな人だって居るだろうに、と僕は少し禿げた彼の頭を見ながら思ったものだ。子供を守るために必死で働いて、それで人殺しと罵られるなんてあんまりだ。

それに比べて僕の母は極平凡な主婦として、平凡な日々を送って死んだのだし、僕には母が死ぬと言う事は前もって判っていたわけで、僕はむしろ彼の為に悲しむ事にした。

彼も僕も母も、皆生きていたのだし、間違った事なんてしていないのに、人は死んで被害者だとか加害者だとかが出来ていく。この世はなんて悲しい世界なんだろうと、僕は子供なのに実感してしまった。正しい事などこの世界には無いのだと知ってしまった。

いや、この憂き世に注ぐ一条の光が有るなら、それが死を告げるという事だけは正しい。そんな悲しい事を幼い僕は知ってしまった。そして僕はこんな大人になって、極平凡なサラリーマンとして雑務に追われているのだから、笑い話にもなりはしなかった。

始業を告げるチャイムがきんころんと明るい音を立てて、僕は我に帰ると慌てて立ち上がり姿勢を正した。井沢君も中村さんも同じように起立する。遙か彼方の課長殿が咳払いを二度して、「えー」から始まる演説を始めた。

彼の朝礼は長いばかりで中身が無いから、僕は時折頷きながら聞いた端から内容を忘れていく。世界情勢が我が社がと大きな事を言っているけれど、きっと彼も本当は最近反抗期を迎えて「お父さんの物と一緒に私の服を洗濯しないで」とか言い出した愛娘の事とかで頭がいっぱいなんだろう。人間は結局身近な事しか考えられないのだ。

近頃は会社の規則も厳しくなってきたので、課長殿の演説もきっかり五分で終わりだ。僕はちらりと壁の時計を見て、それからその下にかけているカレンダーを見た。今日は金曜日。つまり明日は土曜日。

明日には、にいちゃんに会える。

そう考えると僕は何だか元気が出て来て、そして今日もルーチンワークをこなす活力を得る事が出来るのだった。

2 にいちゃんのこと

待ち合わせの噴水前には若者が多かった。白い石造りの、真ん中で壺を抱えた天使が滝を作っている噴水は、古びて綺麗な物ではないが、駅前のそれは待ち合わせにちょうど良いので、周りには人が大勢居た。

少し周りを見てにいちゃんが来ていない事を確認すると、噴水の一角に腰掛けて駅前を眺める。男も女も若者、とりわけ十代の子が多かった。五月の日差しを避けようと、女の子はラフな服の上に長袖の上着を羽織っている。男の子は早くもＴシャツ一枚にサンダルで歩いている感じだ。

僕はというとＴシャツの上にゆるゆるのシャツを重ねている。少し日差しで暑いけど、後ろから風に乗って流れてくる湿気のおかげで少しはマシなような、むしろ余計に鬱陶しいような、とても微妙な感じだ。

この時期はあらゆる事に微妙という言葉が似合う。空の色は霞んでいるでもなし澄み渡るでもなし、山の色は栗の花のせいで妙なまだら模様だし、日差しは強いのに風は肌寒いし、やる気は有るのに元気は出ない、そんな季節だ。

ゴールデンウィークも終わってしまつて、なんとなく（本当になんとかなくけど）力尽きた感じが体中を重くさせている。そんな時期だ。ここで上手くエンジンをかけ直せない奴が、五月病にかかるんだと思う。

駅前は土曜日とあってそれなりに混んでいる。この噴水の周りは

待ち合わせの人が多く、皆して止まって携帯をいじりまわしているが、数歩離れると人が忙しく何処かを目指して歩いている。

今日も仕事のスーツの人や、別の場所で待ち合わせなのか無表情で歩いて行く女の子、大きなリュックを背負ったアキバっぽい人、手を繋いで行く若いカップルに、きゃいきゃいと大声で笑いながらのろのろ進む老若男女の友人グループ。

それらが噴水を避けて流れて行く様は、なんだか面白い。ここだけ流れから弾き出されているようで、無性に心細くなる。だからこそ噴水の周りでは皆、すぐに携帯を開いて、今何処？ と相手に尋ねずにはいられない。とてつもなく不安な気持ちになるのだ。でも僕はそういう感じも嫌いじゃないから、携帯はお尻のポケットに押し込んだまま、ぼうつと景色を眺めている。

時々空からキラキラ光るものが飛んでいたけど、近くには降って来なかった。こんな僕でも、時々矢が自分に向かってくるんじゃないかと不安になったりもする。曇っていたのに急に晴れ間が差したりすると、思わず逃げ出したくなる。

そんな事をしても無駄だという事は母の死から判っているし、「その時」の確信を感じない限り平気だとは思う。しかし気持ちばかりはどうしようもない。やっぱり僕も死ぬのは怖いのだ。いつ矢が降ってくるか判らない。それはとてつもなく怖い事だ。

だから僕は言いたい事は言うようにしている。好きとか嫌いとか良いとか悪いとか、ありがととか。そういう言葉をはつきり人に伝える事にしている。おかげであんまり友達は居ないし、恋人にもあまり恵まれなかった。そんな中でいちちゃんは、僕にとって特別な人だ。

「ごめん、待たせちゃったかな？」

声をかけられて我に返ると、すぐ側にいちゃんが立っていた。にいちゃんは少しだけ茶色に染めたボブカットの髪をふんわりさせていて、青いワンピースに白いカーデガンを羽織り、そんなにヒールの高くないサンダルを履いている。女の人がよく持っている、何が入るのか判らないような小さなバッグとは違って、にいちゃんはいつもトートバッグを持ち歩いている。

女の子としては極平均的な体型だ。太っているでなく、痩せているでなく。なのににいちゃんはなんだかふんわりした雰囲気で、それが僕はどうしようもなく好きだ。

にいちゃんはいつだって待ち合わせに遅れたりしない。僕の方もデートの日にはいつもより熱心に早起きをするから、およそ僕等の関係の中で遅刻という事は無かった。だから今日も二人は時間より少し早くに落ち合って、僕は「今来たところ」というお決まりの言葉を返して立ち上がる。

「行こっか」

にいちゃんはそう言って柔らかく笑う。その笑顔がまたどうしようもなく可愛い。彼女自身はこう言っちゃなんだが、美人と言うわけではない。例えば歯並びが少し悪い所とか、そばかすが有るところ、左眼は二重なのに、右眼は一重なところ。

彼女は美人ではなかったし、色気もあまり無い。けれど何故だかすごく可愛い。抱きしめたくなる。その後に続くものなんてどうでもよくて、僕はただただ、彼女を抱きしめていたいと思う。守ってあげたいと心から思う。この無気力な僕にそうまで思わせる何かがある。

だから僕はいちやんとの関係を、何と呼ぶべきなのか未だに良く判らない。する事はしているので、ただの友達ではないけれど、だからと言って恋人というのも何か違う気がする。僕等は世に言う情熱的な恋というのをしていない。知らず知らずの間に愛し合っていた、そんな感じだった。

僕等は世間話をしながら歩き始めて、市内電車の乗り口に向かう。人はそれなりに多かったけれど、にいちやんと一緒に別段気にならない。市内電車が有るような田舎の、けども一番の街中を僕等は歩いて行く。時折また矢が飛ぶのも見えたけど、僕はいちやんと一緒にいるのが楽しくて、あまり気にしなかった。僕が暗い気分だろうが明るい気分だろうが、人は死ぬんだから、だったらこんな日は思いっきり笑ったほうがいい。

今日は水族館に行く事になっていた。ショッピングモールの中にひっそりと有る、アーチ型の水槽を下から見やるやつだ。見終わったらそのまま買物も出来るところが便利で、だからこそ僕等の他にも家族連れやカップルなんかがそれなりに居た。

水族館というのは薄暗いし、なんとも言えない独特の空気が有る。

それこそ水の中に居るような、妙な感じだ。なんだかひんやりしているし、自分も何か、そうウツボか何かになって、魚達と一緒にそこに隠れているような、妙な気持ちになる。

僕はそういう感じは好きだ。いつもと違う世界というのは、何だかんだ言って楽しい。そこに居ると、世界と一緒に僕も違う生き物になったような気分になる。

でもこれが動物園だと、どうも良くない。どちらかと言うと、そこからギヤアギヤ騒いでいる子供の気持ちになってしまって、あくまで人間の僕が残ってしまう。それではいけないんだ、上手く言えないけど。

僕等はのんびりとアーチの中を見て、長い時間を過ごす。にいやんも水族館が好きみたいで、本当にじっくりと水の世界を楽しむ。土管にぎゅうぎゅうつまったウツボや、ちょっと間抜けなエイの裏側とか、何を考えて生きてるんだろうと心配になってしまいうくらげとか、光る水面の揺らぎさえも、とにかくただただ見る。それがなんととも言えず幸せなのだから不思議だ。

そう考えてみれば、僕とにいやんはいつだって妙な時間を過ごしてきた。それが心地良いというのはもしかして、僕等には何か妙な因縁が有るんじゃないだろうか、と時々思う。でもそれがなんなのか、未だにさっぱり判らない。

にいやんの本当の名前を、僕は知らない。大学からの付き合いなのに、僕等はお互いが深い所まで知り合おうとはしなかった。

一応、にちゃんは、木下にあ、という名前だと教えてくれている。とてもそれが本名だとは思えない。けれどにちゃんが、本当の名前を書いたり名乗ったりする所に未だに立ち会えていないので、だから僕にとってにちゃんは木下にあで別に構わない。

にちゃんは僕が下の名前を嫌っていると知っていて、僕の事をカンちゃんと呼ぶ。にちゃんにそう呼ばれるのは嫌いじゃない。だから僕はにちゃんの前では、カンちゃんて居る。

にちゃんは僕にも他の人にも、昔の話を一つもしなかった。それは僕もそうなのだけど。だから僕等はお互いの事を、大学以降の姿でしか知らない。

にちゃんと初めて出会ったのは、多分、大学の入学式だったと思う。自信は無い。悲しいけど、一目惚れなんてドラマチックな出会いは出来なかった。だから何度もそれまでに会っているんだろうけれど、意識し始めたのは別の日だ。

僕とにちゃんは違う学科だったから、あまり会う機会はなかったけど、にちゃんの女友達が僕等の学科で、遊びに来ている彼女は良く見かけた。その女友達というのが、ユキちゃんという、そりゃあもうこの学校にも居るだろう変な子だった。

天然パーマの髪をポニーテールにただけで、化粧もしないし、コンタクトじゃなくて眼鏡で、いつも地味なＴシャツがあるいは異様に派手なＴシャツを着ているし、お世辞にも可愛くはなかった。いつも無愛想で無口で、僕はなかなか好きになれなかったけど、ユキちゃんにはにちゃんが遊びに来ると別人のようによく笑いよく喋って、僕はいつも驚かされた。

そして僕は単純に、にいちゃんには人をここまで変える何かがあるんだと考えて、彼女に興味を持った。ひとまずユキちゃんと友達になれば、にいちゃんとも友達になれるだろうと踏んで、勇気を出しユキちゃんに話しかけた。彼女はやっぱり無愛想だったけど、僕はそれまでの人生で一番と言える頑張りをみせて、ユキちゃんと接し続けた。

ユキちゃんの持っている物や好きな物を調べて、おかげでシドニイ・シエルダンを全巻読破する羽目になったけど、どれもとても面白かったし、それにユキちゃんと話が盛り上がって良かった。

ユキちゃんは本当はとてもよく喋る子だった。特に好きな事に関しては夢中で喋って、ああこれがマシンガントークって奴なんだなと妙に感心したものだ。そうこうするうちにユキちゃんは思惑通り、僕をにいちゃんに紹介してくれた。

僕等は仲良くおしゃべりをして、どんどん親しくなっていくた。

そうそう、言い忘れたけど、僕の男友達のコウも一緒だった。コウはいわゆるゲームオタクって奴で、長い間ユキちゃんの文学オタクっぷりに文句を言っていたけど、今では結婚するとかしないとか言っているんだから、男と女ってのは判らないもんだ。

大体、プログラミング科に文学オタクが居るなんて変だとユキちゃんに言ったら、彼女は小説もプログラムも変わらない、要はしたい事が有ってその通りにするだけでしょ、と言っていた。なるほど、そう考えればプログラムも単なる文章に過ぎない。ユキちゃんは、あそこで文学を学んでいたのだった。

さておき、僕はいちゃんと仲良くなつて、いっぱいデートをした。ゲームセンターに行ったり、映画を見に行ったり、とにかく行ける所には何処でも行った。女の子特有の異様に長くて面倒な、シヨッピングというのにも付き合つた。僕はいちゃんと一緒に居られるだけで楽しくて嬉しくて幸せで、長い間にいちゃんにセックスどころかキスも要求しなかつた。

ある日、いちゃんが「うちに泊まつて」と彼女のワンルームに呼んでくれたので、ウキウキ行つて、一晩中賑やかに笑い話をしたら、明け方になつてにいちゃんが急にケタケタ笑い出した。僕も思わず笑つたら、「ばか」と軽く怒られた。何で怒られたのかよく判らなくて、しばらく考えていると、「何もしないで帰るの?」と言われて、それで初めてにいちゃんが何故僕を家に呼んだのか判つた。

だから僕も大慌てで素直に言つた。ごめん、いちゃんと話してるだけで幸せで、楽しくて、一緒に居るとそっちの事まで頭が回らないんだ。するとにいちゃんは「私って魅力無い?」と言うので、それにはブンブン首を振つた。

「にいちゃんはいかいよ、僕だつてその気は有るし、一人の時は色々考えるんだ。でもいざ目の前にすると一緒に居る事が嬉しすぎて、それで充分の気がするんだ」

そしたらにいちゃんはしばらく無言で居たけど、やがてぷつと吹き出して言つた。

「カンちゃんって面白いね。もう」

それでにいちゃんは僕をぎゅつと抱きしめてくれた。僕は何がな

んだか判らなくてぎゅつとされていた。にいちちゃんの胸や腕は暖かくて柔らかくて、どうしようもなく幸せな気持ちになり、何故だか頭の中で「おかあさん」と名を呼んだ。そして僕はようやく、にいちちゃんに何を求めていたのか理解して、それで彼女にキスをする事が出来たのだった。にいちちゃんの唇は温かくて、柔らかかった。

手を振るイルカやじろじろ見てくるウミガメに別れを告げて、僕等は水族館を出た。少しお腹が空いたので、何食べる？ と尋ねると、オムライスとのこと。彼女の目線の先には、既に小さなレストランと、その見本のオムライスが有った。

ショッピングモールの中に有るレストランだから、他の客は食事と休憩を兼ねて入るらしく、皆して買い物袋をいっぱい椅子の上に置いて長話をしている。僕等は奥の窓際の禁煙席に案内された。

何処にでも有る安っぽいレストランで、すぐにお冷とおしぼりが来て、注文の際はボタンを押して下さいって話だった。にいちちゃんは四つのオムライスの写真を見比べて悩んでいたけれど、オムハヤシにしたようだった。僕はからあげ定食を頼む。

モールの四階の窓からは、他の買い物客がウロウロしているのが見えた。ご飯が来るまでの間、僕等は下らない世間話をする。電氣代が高いとか、新しいアーティストが良いとか、面白いドラマのあらすじとか。コウちゃんは元気？ と聞かれて、ユキちゃんに聞いた方が早いよと答えたら、彼女は笑った。

ユキちゃんとコウの熱愛っぷりは見てるこっちが恥ずかしいぐら

いで、おかげで僕等は人前でいちゃいちゃされる事の気まずさを学ばせてもらった。二人は僕等のメールにもろくすっぽ返事もしないし、ああ本当に燃えるような恋をしちゃってるんだなあと思うと、少し羨ましい。僕等はやっぱり、恋はしていない。

しばらくするとオムハヤシとからあげ定食が来た。見本よりもおいしそうで良かった。ふわふわのとりとろなオムライスは本当に美味しい。にいちゃんは嬉しそうに、でも行儀良く「いただきます」と手を合わせてから食べ始める。僕も手を合わせて、それからからあげに箸を伸ばした。

塩をかけただけのシンプルなそれは、外はさくさくなのに中の肉は柔らかく、肉汁が滴るような絶妙な揚げ加減で、ああこの店は当りだなと思った。にいちゃんも一口食べて、満面の笑みを浮かべると「おいしい」と言った。それがあまりにも幸せそうだから、僕も自然と満たされたような気持ちになる。

そっという顔をする人をもう一人、僕は知っていた。母だ。

母が死んだ時、父は泣いた。泣いたけど、母を撥ね殺したおじさんを、罵りも恨みもしなかった。心の中でどう思っていたのかは知らない。ただ父は声も出さずにただ静かに泣き続けた。あれならいっそ怒ってくれたほうが、おじさんとしても気が楽だろうと思うほど、父の悲しみは深く暗く、そして静かだった。

人の生死は矢に決められる。何人もあの黄金の矢から逃げる事は

出来ない。抗つても悲しんでも、全ては無駄な事なのだ。この世に生まれたものは死ぬ、ただそれだけの当たり前の事だ。だから父はその運命をひっそり受け入れた。抗いも嘆きもせず、疑問も叫ばず、ただ静かに愛しい人の死を認めた。

今、僕はいちちゃんという大切な人を得たから、父がどんなに難しい事やつてのけたか判る。僕は父や母や自分の死は、仕方無いと受け入れられるだろうが、でもはいちちゃんがもし死ぬとしたら、それは耐え難い事だ。

僕はきつといちちゃんに刺さるぐらいなら、と身を呈して彼女を守る為、矢に立ちはだかるだろう。そうした時に僕等がどうなるのかは判らない。僕に矢が刺さるのか、それとも決まっていたとおりに、にいちゃんに刺さるのか、あるいは二人仲良く串刺しにしてもらえるのか。そうしたら二人で一緒に死ねる、それは幸せな事かもしれない。

僕がいちちゃんを失いたくないように、彼女も僕を失いたくないだろうから、彼女の為を思うなら僕は生きているか、彼女と一緒に死んだほうが良いのかもしれない。そんな事を考え始めると、僕はどうしようもなく焦ってしまって、胸がぎゅうぎゅう締め付けられるような気持ちになる。だから僕は時折発作のようににいちゃんを抱きしめたり、名前を呼び続けたり、特に用も無いのに電話をかけたりした。

僕はいちちゃんを愛し始めてから、少し変わった。特によく言わ

れるのは、女の人の胸を見ているらしい。他の人にとってはそれはいやらしいセクハラなのかもしれないけど、僕は相手の無事を確認しているだけだ。それを知らずに皆は僕の視線を笑うし嫌がる。僕は無意識に見てしまっているし、これはもうどうしようもない。

にいちちゃんは胸があまり豊かではないから（その代わり何を着ても良く似合うよ、とフォローしたら打たれた）僕が胸の大きな人が好きなのだと勘違いして、拗ねてしまった事が有る。

僕は、確かに胸は大きい方が好きだけど、それは性的なファクター、つまりオプションのようなもので最重要項目では無い事、にいちちゃんのつんと上を向いた乳房が好きだという事（これを言った時にいちちゃんは顔を赤くして「止めてよっ！」と怒鳴った）それと四苦八苦しながらも、僕にはある一種の勘が有って、相手の胸の辺りを見ると、健康状態がちよっとだけ判るのだ、と説明した。その証拠に僕は男の胸だって見てるはずだ、僕がホモだって言いたいのかと訴えた。

にいちちゃんはその日、僕を打った拳句に部屋から追い出して、しかも三日にわたって口も聞いてくれなかった。でも次に会った時、にいちちゃんの顔よりも先に胸を見てしまった事がよほど面白かったのか、それともアホらしくなったのか。彼女は笑って僕を見てくれた。

「今日の私の状態は判った？」

にいちちゃんが笑顔で聞いて来るので、

「納得はいかないけど、怒ってはいないかも」

と返事をしたら、彼女はくすくす笑って、

「納得はしているよ。ごめんね、カンちゃん」

と頭を下げてくれた。

後で聞いた話によれば、その三日の間に、にいちゃんは改めて僕の事を調べたらしい。なんと実家の父にも会いに行ったと言ったから驚きだ。意外とアクティブなんだなあと感心したぐらいだった。

彼女は僕の友人や父から、僕の不思議な予知能力について聞いていた。「アイツが「誰々が死ぬ」と言った時には、必ずそうなる」という大層不気味な話をしてくれたらしい。

本来なら怒りたいところだが、今回はこの、僕を死神扱いするような話がうまくいった。にいちゃんは僕の言った事が口からでまかせじゃないと、ある程度本当の事なのだと判ってくれた。そこにむけて、彼女の顔ではなく胸を見た事に、ようやくにいちゃんは納得してくれたのだった。

そんなこんなで僕らは時折喧嘩をしながら、それでも仲良く、静かに生きていた。

彼女がオムライスを食べ終わるのを待つ間、僕は静かに、そして穏やかに、けれど強く、この時間が、にいちゃんと僕がこうして座っている瞬間が、ずっと続けばいいと願うのだ。

レストランを出ると、僕らはしばらく洋服を見て、にいちゃんのために一枚シャツを買った。何故だかふんわりして見えるにいちゃんは、フリルとか花柄だとかを身につけると、やり過ぎという感じ

になるので、シャキツとしたシャツやジーンズが良く似合った。

にいちゃんはそういうさっぱりした服を着ても、女の子らしい柔らかさが残って、たぶんそれはにいちゃんが普通の子より少しぽっちゃりしているという事なんだろうけど、でもそういうところもひっくるめて、僕は大好きだった。

にいちゃんは仕事の話をしてない。何処かの会社で、所謂OLをやっているらしいけど、仕事や職場の話は一切しなかった。それは僕も同じなのだけれど、思うに女のそれと男のそれは、違う。女の子が仕事の愚痴さえ言わないのは妙だ。だから僕は、もしかしたら彼女が職場で上手くいってないのかもしれない、と思っている。聞く事は出来ないけれど。

だから僕らの会話はいつも他愛ないものだった。TVや漫画や、映画やニュースの話だ。その日も最初はそうだったのに、今日はいつもと少し違った。

河川沿いの小さな公園で、夕日を見ながらベンチに座り、二人で川の流れを見ていた。向こうを走る車と、後ろの車道を走る車、家に帰る子供の声や、散歩中の犬の声がうるさくて、ムードも何も無かった。でもそういう、日常的なんでもない風景が、僕は好きだ。これが平穏とか平和とか言われるもの、そのものなんだ。

僕らは力モのシルエットがゆらゆら川を流れていくのを、ただただ見ていた。ゆったりとした時間。日が傾いて、気温がゆっくり下

がってくる感じ。太陽の色が、次第に橙になって、空に色だけ残して消えていく感じ。何もかもが遅くて、僕はその時間がとても好きだ。それに、太陽が出ていなければ、矢も降って来ない。

「カンちゃんはさ……」

ふいに、にいちちゃんが口を開いた。

「将来の夢って、有るの？」

今更な、けれど初めての質問。正直、僕は困ってしまった。将来の夢、だなんて楽しい響きの生活とは無縁だったから、僕はそういう事をあまり考えない。強いて言えば、今日と全く同じ明日が来て、誰も死ななければいいと思う。けれど、それは夢ではない。幻だ。

困ってしまったので、「にいちちゃんは？」と聞き返してしまった。それがまた良くなかったらしい。彼女は答えない。

二人して黙ってしまった。小学生くらいの子供が五人、キヤアキヤア声を上げて走って行った。気まずい時間だった。

「私はね」

にいちちゃんは静かに、少し笑って言う。

「お母さんになるのが夢なの」

そう言うにいちちゃんの顔は穏やかで、僕は安心した。機嫌を損ねたわけではないらしい。

「子供が欲しいって事？」

「それもそうだけど……お母さんって言う存在になりたいの。大きくて、優しくて、温かくて、柔らかくて、静かで、だけど逞しくて、包んでくれて、撫でてくれて……それで、愛してるって言ってくれる、そういうお母さんに」

ああ。

「私、いつかなりたいの」

にいちちゃんは、お母さん知らないんだ。

僕は漠然と、そう思った。

「僕は」

そしてただなんとなく答えた。

「何かを残したいんだ」

あまりになんとなく出た言葉で、それだけに僕は心底驚いた。

こんな無気力な僕でも、死にたくないと、消えたくないと願って止まないのだ。

家に帰ると、父が「向井さんの娘が、交通事故で死んだらしい」と言ってきた。向井さんが誰かは判らないけれど、どんな娘が死ん

だのかは判る。僕は「気の毒だね」とそれだけ言つて、部屋に戻つた。

人はいつでも何処でも死ぬのに、どうしてこんなに簡単にそれを忘れて、のんびり生きているんだろう。時には馬鹿な事をして、やる気が出ないと昼寝をして、つまらない事で怒ったり笑ったり出来るんだろう。本当は目も閉じられないくらい、死ぬのが怖い夜もあるというのに。

布団に潜つても、なかなか眠れなかった。何度か自分の胸に矢が刺さっていない事を確かめて、それでようやく落ち着きを取り戻す。矢が刺さっていない人間が死んだところなど見た事が無い。そういう意味では、ドラマは非常に陳腐なものだった。死体に矢が刺さっていないんだから。

僕はようやくと目を閉じて、うとうとし始めた。もう寝よう、明日からまた、楽しい仕事だ。そう言い聞かせる。ふと、死ぬという事を忘れていないと、人は死んでしまうのではないかと、思った。

3 彼らのこと

昔から何故だか、別段仲が良いわけでもない人から、妙に真剣な話をされる。こんな無気力な僕に相談なんてするはずがないから、僕は体の良い「穴」なんだと思う。王様の耳はロバだーっ、と言うわけだ。僕はあまり積極的なほうでもないし、「これは秘密だけど」と前に付いた事を他に喋った事も無いので、それも有るだろう。

そんなわけで僕は今、それほど仲が良い訳でもない井沢君と、何故かテーブルを囲っている。小さな居酒屋で、洒落ていて、静かだ。少し薄暗いランプの下で、僕らは自然と声を潜めて、静かに酒を飲んでいた。黒塗りのテーブルには、日本酒と小鉢ばかりが並んでいる。

「俺の親父がね」

井沢君はニコニコ笑ったまま言ったものだから、

「脳卒中でさ」

と続いても、僕は枝豆を食べながら「へえ」と言ってしまった。少し経ってから吃驚して顔を上げた。へえ、どこのの騒ぎじゃない。

「大丈夫なのかい？」

努めて真剣に尋ねたけれど、井沢君はやはりヘラヘラ笑っている。それほど飲んだわけでもないのに、彼は妙に楽しそうだった。

「いや、もう二年も前の話でさ。だけど左半身が麻痺しちゃってね。おまけに結構な歳だから、ボケてきちゃって」

「それで、面倒を？」

「うん、看てもらってる」

どうも話が噛み合わない。

「誰かに看てもらってるって事かな」

「うん、母さん。母さん、胃が無いんだ」

井沢君の話は要領を得ない上に、内容が穏やかじゃない。少し酔っていた頭をなんとか回転させて、話をまとめてみる。

井沢君の母は六五歳で、五年前に胃癌にかかり、手術をして胃が無くなった。すっかり少食になって、痩せ衰えていく妻を、井沢君の父は一生懸命面倒を看たらしい。だが心の方は少しづつ弱っていたようで、半年前に疲労か心労が祟って、脳卒中で倒れた。以来、左半身が麻痺した夫の介護を、その痩せ衰えた妻がしているという。

「それは……」

大変だ、なんとかしてあげられないか。そう思っただけで、僕は何も言えなかった。こういう問題はあまりにもデリケートで、何を言ってもいけないような気がした。

「そうなんだよ」

何も言っていないのに、井沢君は頷いた。

「でも俺は、そんな両親を放って会社勤めをしているんだな。ちなみに俺は長男にして、一人っ子なわけ」

それで僕は、彼が何を求めているのか、少々理解出来たような気がした。

「だけど井沢君、お金が無いと介護どころか、生活もしていけない。働く事は、別に悪い事と言うわけじゃない」

悪い事だとも、良い事だとも言い切れなかった。お金も無いのに介護をしろという権利は誰にも無いけれど、親の面倒は子が看るべきだというモラルは有る。井沢君は極めて難しい立場に置かれている。しかも、たった一人で。

同僚なんだから、給料も大体同じぐらいだろう。それほど恵まれた金額はもらっていない。年金が出るか出ないかの時期だから、親の生活費も払っているとしたら相当キツイ。なのに、世間は彼を親不孝者として見るというわけだ。だから僕には、肯定される事を望んでいるのだと思う。

でも僕は嘘を吐くのは好きじゃないから、言葉を濁してしまった。こいうのは良くないな、と思い直して、言葉を考える。

「君が真剣に考えて、生きた結果なら、どれも正しいんだと思うよ。問題は、生きていく姿勢とか、向き合ったかどうか、なんじゃないか」

なんて馬鹿らしい言葉だろう。生きていく姿勢が悪いのは僕のほ

うだ。何が良いとか悪いとか決める事は良くないけれど、今の僕が必死かと言われれば、そうじゃない。つまり、しっかり生きていない。だから僕は悪い奴だ。悪い奴が説教出来るような事ではない。

井沢君はどう思ったろうか。不安になって彼を見ると、妙に真剣な顔をしていた。そんな表情は、見た事が無かった。

「俺、部署が変わろうと思ってるんだ」

「会社を辞めるんじゃないくて？」

「営業に回してもらえば、出来高制だし、それに給料も上がるみたいなんだ。でも営業なんてした事無いし、正直不安で、ふんぎりがつかなかったんだけど……」

井沢君は僕を見て、またニツコリと笑う。

「なんか、ふっきた。佐藤と話せて良かったよ、ありがとう」

僕は別に、何も言っていない。井沢君にありがとうと言われるような事は、何も。

けれど彼は大層感謝して、奢ってまでくれた。僕は家に帰ってもさっぱり訳が判らない。試しににちゃんに電話をかけて聞いてみる。

『うーん、でもそれって、なんだか判るかも』

にいちちゃんはしばらく考えて、それから答えてくれた。

『人って、本当はいつも答えを知っているんだって。でもその答えを認めて、そっちに進むにはパワーが居るから、普段は見えて見ぬフリをしているの』

悩んでいる人も本当は答えを持っていて、だから話をただ聞いてあげるだけで、彼らは自分の答えと向き合う事が出来る。

井沢君は最初から、このままじゃいけないと思っていて、何とかするための方法も判っていて、でもきっかけが無かったから止まっていた。だけど僕に相談して吹っ切れたという、自分の心を整理出来たというきっかけを得て、動き始めたというわけだ。

「じゃあ、別に僕じゃなくても良かったんだ」

僕はそう思ったけど、にいちゃんはそうは思わないらしい。

『カンちゃんは皆の話を、真剣に、じっくり聞いてくれるの。どんなつまらない話もちゃんと聞いて、最後まで待つてくれるの。それってすごくありがたいんだよ。その人も、カンちゃんだから話せだし、カンちゃんに最後まで聞いてもらえたから、自分の中の答えに辿り着けたんだと思う』

僕は生きているという事に興味が無いわけで、だから誰のどんな話も等しくどうでもいい。それが何でも真剣に聞いているように見えるなら皮肉な話だ。僕はただ、誰の話もそれほど特別に思っていないというだけなのに。

それでも僕は井沢君や中村さん、にいちゃんやコウやユキちゃん

の事が気になるし、彼らの言葉は僕のつまらない生に、光を灯したり消したりしている。それは本当のところ、僕が諦めきつていないという事だ。それが良い事か否かは、今の僕には判らない。

にいちちゃんは答えが全ての人の中に有ると言っていた。僕も答えを持っているのか——いるんだろう。でも今は、それを見つける時ではないのだ。

だから僕には、不吉に空を走る光の矢しか見えない。

父が、妙に深刻な顔をしていた。

父は昔から物静かなほうで、それこそ母が死んだ時も悲しむばかりで、声も上げなかった。けれど、涙をこらえきれず、顔を顰め、震えている父の背中は今でも良く覚えている。激情を表さないだけで、父にも感情は確かに有る。今でも毎月、命日になると墓参りに行っている彼は、確かに、確かに母を愛していたのだ。

ただその変化はハッキリと僕にも判った。父は落ち着かない様子で、そわそわしている。時計を見たり、壁を見たり。一緒にTVを見ようと誘ってきたのに、TVは少しも見ていないし、番組は少しも面白くなかった。

小さな明るいいリビング。この家にはかつて、母が居た。一緒にふかふかのカーペットに寝転がって昼寝をした。子供の頃の思い出は、大体このリビングに集約される。今、そのリビングには、僕と父が

居て、二人でテーブルを挟んで向かい合い、ＴＶを見ている。いや、父は僕を見ているし、僕はＴＶを見ているような顔で、父の言葉を待っている。

何か、言いたい事が有るのだ。父は口下手だから、いつも最初の一言を発するのに苦労していた。

「あのな、あの……」

父はおずおずと口を開く。顔を見ると、彼はまた俯いて、「その」と口ごもってしまう。昔から奥手な人だった。母に愛しているところに伝えもせず、死に別れた事を悔いていたのに、やっぱりこの人は言つべき事を言えない。

「なに」

興味無さそうに続きを促す。そうするとやっと父は覚悟を決めてくれる。下手に「何か有ったの？」などと真剣に聞くと、「いやなんでもない」と引つ込める。不器用な人なんだ。

「実はな、父さんな……」

「うん」

「ガン、なんだ……」

その告白には少し驚いた。咄嗟に父の胸を見るが、今のところ、矢は刺さっていない。

「いや、いやな、まだ小さいから、大丈夫なんだけどな。ただその

……入院しなくちゃならないから……」

「僕の事は心配要らないよ。いつまでも子供じゃないんだし。しっかり治しておいでよ」

そう言っても、父は不安そうだ。そりゃあそうだろう。何しろガンド。単に長生きだから、とはいえ、この国で最も死者の多い病気だ。「いや、いや……」と何か呟いて、首を振ったり、傾げたり。まだ何か言いたい事が有るらしい。

「あのな、……父さんもいつかは、死ぬんだ」

だから、お前もそのつもりで、生きて行かなくちゃいけないんだぞ。

今更何をぬかす、というのが、正直な感想だった。

父は幼い時からサラリーマンだった。僕もその道を歩んでいるんだから、それを否定するつもりはない。物心ついた時には、いつも仕事で居なかった。土日仕事で居なかった事も多いし、口数の少ない父とはあまり話もしなかった。そんな父のどこが良かったのか、いつも柔らかくて優しく明るい母は、それでも大層父の事を愛していたらしい。献身的に家事をこなし、ろくに家に居ない父に文句の一つも言わなかった。

父にしてみれば、必死で働き、収入を得る事が家族の幸せに繋がると信じていたし、また母もその考えに納得していた。だから遊びに行けない時にも、母は「お父さんは私達のために働いているのだから、私達は感謝しなくてはいけないのよ」と言ってきかせていた。尤も、幼い僕にはそんな事は到底無理だった。

父は僕らの為に働いて、母はそんな父を支えて、僕はただただ子供で。それはそれで幸せな時間だったんだろう。母が急死するまでは。

葬儀が終わっても、納骨が終わっても、父は後悔し続けていた。もつと遊ばせてやりたかった、もつと色んな場所に行きたかった、もつと話をしたかった、愛していると伝えなくてはいけなかった。何もかも手遅れで、父は深く深く悲しみ、悔いた。無駄な事だと判っている、止めようがなかったのだろう。毎日のように、微笑みを浮かべる遺影に話しかけ、そして最終的にその全ての後悔を僕に注いだ。

即ち、僕と遊び、僕と色んな場所に行き、なるべく話し、そして節目節目にはおずおずと、控えめに、愛していると告げた。土日は会社に行かず、僕との時間を取るようになった。本当は母と、あるいは僕と三人での時間にしたかったものを、僕につき込んだ。

だからこそ、父は不安なのだ。まだやり残した事が有るんじゃないか、そして、残して死んだ時、僕がどうなるのか。母の死にろくすっぽ泣きもしなかった（実際には泣いたけど、父が想像したほどじゃなかったんだろう）、このドライな子供の事を、心配して止まないのだ。

入院といっても三日程の事で、医師から説明を受けたがよほど小さいガンだったらしい。毎年の健康診断で見つかったというのだから、まあ初期段階なんだろう。一年もあればかなり大きくなるという話だから、父は運がいい。さらに良い事には、内視鏡で出来るらしく、そう回復にも時間がかからない。

なら死ぬだの死なないだのという話を持ち出すほどの事じゃあない。けれど父にしてみれば恐ろしい事なんだろう。死刑宣告を受けたようなものだ。僕は彼の胸に矢が刺さらない限り、そうだとは思わない。言ってみれば、安心出来る。はずだった。

けれど矢は刺さってから三日以内に効力を発揮する。つまり、その日かもしれないし、明後日かもしれない。刺さったショックで死ぬような人も居る。僕は父が三日以内には死なないという程度の事しか判らない。今まさに矢が降るかもしれない。明日降るかもしれない。判らない。

結局は僕も他の大多数の人間とそうは変わらない。いつ誰が死ぬのかなんて、三日前ぐらいにしか判らない。だから僕にだって、このガンが大した事ではなくて、気にしなくていいと断言は出来ない。医者が何か見落としていたりすればやはり死ぬだろうし、そうかどうか判らない。

白い病室に横たわる父は、随分と歳をとり、痩せていて、それでベッドに沈んでいるわけだから、嫌な事を考えないはずがない。大丈夫だと言いつ聞かせたところで、不安が無くなるはずもない。だから僕は父がそうするように、おずおずと控えめに、愛していると告げた。むずむずする。それ以上に不安でしかたなかった。父もまた

「なんだかむずむずする」とはにかんで、「父さんもだよ」と答えた。

「母さんが死んでから、父さんの希望は、夢は、お前だけだった。今も、この世界で一番愛しているよ。お前は少し冷めた子だけど、でも一生懸命生きている。お前は悪い事はしなかったし、いつも父さんと話をしてくれて、良い会社に勤めてくれて、そして今も元気でいてくれて、自慢の息子だよ。誇りに思っている。だからたぶん、神様がよほど悪い人じゃなければ、父さんが先に死んでしまうから、そんなお前を残していくのが怖いんだ。ずっとずっとお前を見て居てやりたいのに、だんだん頭は禿げてくるし、脳みそは回らなくなつて、名前が出てこなくなるし、関節が重くなつて階段を上るのも一苦労だ。ずっとずっと一緒に居たいのに、時はそれを許してはくれないんだなあ。なあ、幸せになるんだぞ。なあ」

「よしてよ、まるで今生の別れみたいだ」

そう笑ったけど、酷く虚しくて、二人して黙りこくつた。

僕は死と向き合つて、いつも死を見ていて、そして死を意識する生き方をしてきたはずだ。それでもやはり、まだ足りないと思う。父と遊び足りない。父に感謝を言えていない。父に恩を返せていない。皆いずれは死ぬんだから、そんなものは全てどうでもいいかもしれない。でも僕は父が好きだ。実直で穏やかで奥手で、悲しいほど静かな父が大好きだ。固執する事は別れを無駄に辛くすると僕は知っている。だけど、僕は父が好きだ。父として、尊敬している。

黒こげの焼きそばを一緒に不味い不味いと言って食べた事も、洗

濯機が家の中をのたうちまわった事も（撥水加工のコートなんて自宅で洗うもんじゃない）、天ぷらで小火を起こして大騒ぎをした事も、周りはお母さんばかりで、恥ずかしそうに授業参観に来てくれた事も、何もかもいい思い出で、僕は結局他の人達と恐らく変わらないぐらい、父の事を好いている。親として、かけがえのない存在だと思ってしまうている。僕らしくもない。

けれどそれを自覚した今、僕には、父にこの思いを伝える術も、時間も無い。あるいは本当に父は死ぬかもしれない。その時に僕はどうすればいいのか、判らない。

一人で帰った自宅が、妙に寂しい。寂しすぎた。たまらずにいちやんに電話をする。彼女は「電話じゃ無理だよ」と言っ、家に来てくれた。何が無理なのか、言ってくれなかったけど、大体判る。

にいちやんの事は父にも言っている。時には父が「結婚しないのか」と言ったが、僕には良く判らなかった。にいちやんが自分にとってどういう、どれほどの存在で、そして未来をどう築くべきなのか、判らなかった。

にいちやんは家に来ると、「男所帯のわりには、キレイだね」とキッチンを見て感心した。キレイになるまでに五年かかった。それまではもうぐちゃぐちゃで、僕も父も、母がどんな魔法を使って家事をしていたのか、見当もつかなかった。そして次第に家がキレイになり、母が居た頃と同じようになった時、僕らは無性に悲しくなっ、そして静かに母の死を認めた。

フカフカのカーペット、白い壁、フローリング、木のテーブル、

三つの椅子。三人で、そして二人で過ごした空間に、僕はいちちゃんと寄り添っている。静かに、ただただそれだけ。にちゃんは手を繋いでくれていて、僕はただそのぬくもりを感じているだけ。

にちゃんは特に何も言わず、側に居てくれる。時々大丈夫だよ、と言う。僕はうんと頷いて、そしてまた静かに寄り添う。

夜は好きだ。夜はアルテミスとかいう月の女神様の時間だ。彼女は銀の矢を放つらしい。効果は忘れた。でも僕には、彼女の矢は見えない。死んだ人に金の矢以外が刺さっていないのを見た事が無いから、きっと死を予言するものじゃあないんだろう。なんにしても、夜は人の死が決まらない。少なくとも、僕には見えない穏やかな時間だ。人は死んでいくけれど、新たな宣告は起こらない。

にちゃんに全部話してみようか、と思った事も有る。でもどうでもいい事なんだとも思う。光の矢が見える、だからどうしたって事だ。所詮他の人と少し違うだけで、だから何が出来るわけでもない。役に立たない力だ。無性に憂鬱になるだけの。

「カンちゃんが羨ましい」

ふとにちゃんが口を開く。

「良いお父さんが居て。お父さんと仲良く出来て。愛し合えて。こうして心配したり、されたり。すごく素敵な事。悲しいけど、でも羨ましい」

「……」

「小さなガンだったんだもの、手遅れではなかったんだもの。カン

ちゃんは、機会を得たんだよ。だから、その大事な物を、ちゃんと抱きしめて、守らなくちゃ。その時が来るまで……」

その時が来るまで。

僕は小さく頷いて、そしてにичちゃんの手を握った。

大事な物は、いつの間にか増えていた。守るべきものが、抱き締めるべきものが。

結局父の手術はあっけなく終わって、錠剤を飲み続ける程度の変化しか起こらなかった。

見た目には、そうだった。

プログラムというのは便利なものだけれど、便利なものは往々に

して使い道が判らない。つまり、道具が使えるかどうかは、使い方を知っていて、なおかつ使い道が有るか、という事なのだ。

僕は学校でC言語を習ったし、今でも使えるけれど、今の僕にはコンピューターに命令させてまでしたいような事が無い。僕には使い道が無かったのだ。

それでも時々ボウツとテレビを見ていたりすると、時々NHKを見たりもして、更にたまにはコンピューターの話をしていたりする。新しいソフトや技術の紹介を見ると、僕は柄にもなく、何だそのぐらい、と思ってしまう。更に時々、僕ならこうする、と思ったりもする。

それでも僕は時間が無いとか、約束が有るとか、最後には眠いか、僕がしなくても誰かがするとか、そんな言い訳を山程積み上げて、何もしなかった。けれど、最近は少し違う。

久しぶりにテキストに向き合い、C言語を並べてコンパイルの作業を繰り返している。僕にはまだ使い道が無い。でも使い方は知っている。だからそれを思い出して、改めて自分のものにしようとしている。

それは何かを始めるに到った、今はもう営業部に行ってしまった井沢君の影響かもしれない。でも僕は何よりも、僕自身の口から飛び出した「何かを残したい」という意思に従っている。僕は生きていたいのだ。何かの形で生にしがみ付いていたい。何かの形で、僕が今ここでつまらない生を、けれど生き抜いていたという証が欲しい。残したい。

僕は人生を達観しているようなふりをして、逃げていただけなの

かもしれない。生は虚しい。人は些細な事で、そう、矢が刺さったぐらいで呆気無く死んでしまう。けれど、それでも、今ここに生きているという事が重要なのだ。

僕がここに生まれた事は使命でもなく定めでもなく単なる偶然で、そしていつか死んで逝く事も同じだ。僕は必要ではないし、そうである以上、どのように生きても同じだ。

けれど今、僕がここに生きているという事には、確かに意味が有る。僕は未だに死んでいない。それはつまり、僕が自ら、この虚しい生に縋り付いて、生きていくと選択したという事なのだ。いつでも死ぬ事は出来るのに、それをしていないという事に意味が有る。価値が有る。

なら僕は、どう生きても同じ人生を、自らの意思で選ぶべきだ。選ぶためには力が、そしてその末にチャンスが必要なのだ。逆ではない。チャンスを掴むだけの力が有ってこそ、チャンスが見える。

だから僕はテキストとパソコンに向き合う。僕には、僕の生き方が有る。そして僕の死に様有る。そしてそれを見届けてもらいたい人が居る。

にいちちゃんは、本名を木下近子というらしい。それを僕は情けない事に、盗み見してしまった。にいちちゃんがサイフの中身を整理している時に、免許証を見てしまったのだ。

それにしたって、近子は別に変な名前ではない。「子」の名前は流行ってはいないけれど、清楚な感じがして可愛いぐらいで、僕は首を傾げた。にいちゃんは気付いていないらしく、サイフの整理を続けている。

「近子っていうんだ」

何気なく見たように、なるだけ自然を心がけて言うと、にいちゃんはびっくりしたような顔をして、それで僕の前に置いてある免許証を見ると、「あー」と頷いた。

「ばれちゃったか」

「可愛い名前じゃない。近いから、にあって事？」

「うん、そう」

自分の事は「にあ」と呼んでくれ、と言われて、呼びにくいから「にいちゃん」と皆呼んでいた。にいちゃんはそっけない返事しかしてくれない。名前の事は聞かれたくないようだった。やっぱりにいちゃんは、名前の事が好きじゃないらしい。僕が自分の名前を好きじゃないように。

その時の話はそこで終わって、僕らは一緒ににいちゃんの作った

カレーを食べて、まったりと過ごしていた。僕はそういう時間が好きだ。男なら普通は気が気じゃないんだろうけど、彼女とのこういう静かな時間が大好きだ。にいちゃんは柔らかくて温かくて、そこに居てくれるだけで、僕は何故だか満ち足りたような気持ちになる。

「カンちゃん、私ね」

そんな時に、にいちゃんは静かに切り出した。

「両親が居ないの」

僕は急な話に吃驚して顔を上げた。彼女は少し俯いていて、長い睫毛が小さく瞬きするのばかりが見えた。

「置いて行っちゃったんだって」

「置いて？」

「うん、置いて。それで私は「親切なおじさん」に育てられたの。身寄りの無い私を、「親切なおじさん」は引き取って、一五まで育てたの。「親切」だよ」

にいちゃんの言い方には何か含みが有って、僕はなんだか胸が苦しくなった。

「にいちゃんには、親切じゃなかったの？」

「うん。皆、おじさんの事を褒めて、私の事はひそひそ噂したの。お父さんもお母さんも、どうして居なくなったのか判らないんだけど、でもきつと良く無い事があっただと思うの。いじめられはし

なかったけど、でも色んな人に避けられた」

それをいじめと言うのだ、と僕は言えなかった。にいちゃんはひたすら静かに、ぼつぼつと語る。

「おじさんも私をぶつたりはしなかったけど、大事にもしてくれなかった。人前の時だけニコニコ仲の良い親子みたいに振舞わされた。おじさんは優しいいい人ですって、本当の両親より好きですって、いっぱい嘘を吐いたの。本当は、私を置いて行ったお父さんやお母さんに会いたかった、嫌われてもいいから見ても良かった。自分に嘘ついて笑って、夜は毎晩のように一人で泣いてたの」

それで、とにいちゃんは小さく笑う。

「高校に上がる時に、寮で暮らす事にしてね。一生懸命勉強して、いい所に入れたんだ。その時に昔の嫌な自分を捨てたくて、「にあ」って名乗り始めたの。……なんだかんだ言ってもおじさん、私を大学まで行かせてくれたんだから、本当に親切なおじさんなんだと思うの。でもおじさんは私を子としては愛していないし、私もあの人をどうしても、親としては愛せないの」

僕はなんと言っているのか判らなくて、黙っていた。にいちゃんの方は「あー、スツキリした!」と笑って、冷蔵庫に向かうとチューハイの缶を二本持って来る。普段積極的には飲まない彼女が、冷蔵庫にそんな物を入れている事にも、それを僕にも勧めてきた事にも驚いた。

にいちゃんは乾杯しましょ、と言って缶のタブを引く。おずおず従うと、にいちゃんは「かんぱーい」と明るく言って、僕の缶に彼女の缶をコツンと当て、それからグイグイ飲んだ。啞然としている

と、にちゃんはにんまり笑った。

「えへへ、なんだかふっ切れちゃった」

「今ので？」

「うん。ずっと皆に嘘を吐き続けてたのね、私。でも今は、カンちゃんにだけは本当の事言っちゃった。あースッキリした」

にちゃんはニツコリ笑って、僕の顔を見る。

「あとね、カンちゃんは温かくて大好きだよ。優しくって柔らかくって、温かくって大きくて」

「よ、よしてよ」

僕はなんだか気恥ずかしくなってしまうた。それでもにちゃんはニコニコして続ける。

「私、いい娘になるよ。それでいい女になって、いいお嫁さんになって、いいお母さんになるの。……カンちゃんも一緒に居てくれる？ その時に」

僕はなんと言っているかわからず、ただぐっぐと熱くなってしまうた胸に、流し込むようにチューハイを煽って、そして盛大にむせた。

4 僕らのこと

僕を取り囲む世界は、少しずつ変わり始めていた。それは今までに比べれば大きな動きで、少し怖くなる事も有る。でも草木だつて、夏はこれでもかと伸びて変わるものだ。二四歳。今はそういう時なのだ。

ユキちゃんはコウとの間に子供が出来て、ついでだからと籍を入れた。式は結婚式というよりただの忘年会みたいな物になった。大学時代の仲間が集まって、遅くまでギヤーギヤーやった。

その夜、すっかり酔っぱらった僕とにちゃんは一緒にホテルに入り、あろう事が当然すべき事をせずに体を重ねた。つまり、避妊をせずに。僕は翌朝気づいて真っ青になったけど、でも覚悟を決めた。これで出来た子なら、ここで生まれるべきなのだ。男として最大のチャンスと最大の不幸が同じだなんて、皮肉な事だ。なら、チャンスととっておこう。無責任な言い方だけど、それが一番安心出来る。

明るいのが取り柄の井沢君は、営業部で成功したらしい。時々ニコニコ笑って会社の中を歩いているのを見た。その度に僕は「よう」と声を掛け合うだけの仲だったけど、それで十分だった。

中村さんは良い再婚相手に恵まれたらしい。最近二重顎が小さくなったなあ、と思っていたら、寿退社をしてしまった。中村さんは最後に僕の背中をバチンと叩いて、「少年よ、大志を抱け！」とそれだけ言って去って行った。僕は少年じゃあないし、クラークはそんな事、そもそも言っていない。でも、悪い気はしなかった。

夢を見た。

母さんが、血まみれで、道に転がっている。自転車がひっくり返って、タイヤが虚しくカラカラ回る。トラックが無傷で止まっている。運転手は運転席で、ぐうすか寝ていやがる。

僕は腹が立つて、トラックのドアを叩いた。でも僕はどうやら子供のように、手がうまく届かない。叩いても、大した音もせず、運転手は起きない。

「人殺し！」

僕は叫んだ。

「人殺し、母さんを返せ！」

運転手はまだ起きない。

「死ぬならお前が一人で死ねば良かったんだ！ 人殺し！ お前も死んじまえ！ 死んじまえ！」

叫んでいると、運転席の窓から、二人の子供がぴよこと顔を出した。小さな彼らは、僕の顔をじっと見つめている。

じつと、じいつと見ている。

僕は黙って目をそらして、それきり黙ってしまった。

僕もまた、自分に嘘をついていたのだ。ずっとずっと、嘘を吐き続けていたのだ。

僕は諦めてなどいない。悟ってもいない。僕は本当は悲しかった。母さんが死んだ事が、とてつもなく悲しかった。そして母さんを殺した奴が、殺したいほど憎かった。でもアイツには矢が刺さっていなかった。だからアイツは死なないし、僕に、ましてや親父にも殺されないし、殺せなかった。

だから僕は諦めたような、悟ったようなつもりになって、起る事も憎む事も、悲しむ事も止めたのだ。それらが酷く疲れる行為だと僕は既に知っていた。疲れる割に、どうにもならない事だと知っていた。だからいつそ、やらなかった。

どんなに無意味に思える時間にも、どんなに無駄に思える行為にも、存在するだけで得られる物が有るのだという事を、僕は知らなかった。

彼を憎んでも、母の死を嘆いても、事実は変わらない。けれど、少なくとも僕という存在は変化する。僕はそれ乗り越える事によって変化していく。それが成長でもあり、人生でもあるのだ。乗り越えなければ僕は変わらない。ずっとこのままだ。

僕は悟ったわけでも、諦めがついたわけでもない。単に、たくさんの恐ろしい事から目をそらし、逃げていただけなのだ。

人は矢から、死から、終わりから逃げられない。僕はそれが見えるだけで、何も出来ない。僕はその能力をなんとも思ってこなかった。けど、本当は意味が有ったんじゃないのか。僕に、それが見えるという意味が。

僕が見ていようといまいと、嘆こうと無視しようとして、毎日人は死に、世界では四秒に一人は死んでいく。人以外の命を足すなら、億単位で死んでいく。そしてたぶん、億単位で生まれ続けている。

多くの人は、多くの生命はその事実を知っているにも関わらず、それを無視して生き続ける。それは良い事だろうし、もちろん悪い事でも有るだろう。ずっと見続けていたら、息がつかってしまふ。憂

鬱な気持ちがいっぱいになって、気が狂いそうになる。見続けるわけにもいかない。

だから人は、ある時からその事実を忘れていくようになる。生きていくために、生き続けるために。けれどあまりに忘れすぎて、今度は自分は死なないかのような気分になってくる。自分にだけは不幸は起らないような。そうすると不思議と生きているという事や時間に無関心になって、自堕落になっていくのだ。それもまた良くない。今までの僕のように。

光の矢は僕に死が有るという事を、常に知らせてくれる。だけど、僕にその死の形を見せようとはしない。もしかしたらあの矢は、僕に生きる力を与える物なのではないだろうか。

死に逝く者達を知って、そして僕は自ら生きていく事を選び続ける。そんななんでもないような事が、本当は大切なんじゃないだろうか。

そして僕はその事実に向き合って、乗り越えて、生きていくべきだったんじゃないのか。

この憂き世に注ぐ一条の光が有るなら。

僕はそれと共に生きていくのだ。それこそが生きていく力で、そして生というものそのものなのだ。

僕は変わろうと思った。受け入れ、立ち向かい、乗り越えようと、そして生きようと思った。

同じ事が毎日続く事は幸せな事だ。それに不満を持って生きていく事は、良い事じゃない。けれど、今日より少し違う明日が来るように努力する事は良い事だ。どんな日々もどんな物もどんな人も常に変化しているのに、ずっと続いていると思うのは大層な幻想だ。同じ日々をつまらないというのは愚かな事だ。一日として同じ日なんて、本当は無いんだから。

僕は少し頑張る事にした。井沢君ほど大胆には生きられないけれど、僕なりに頑張った。ルーチンワークを効率化したり、良く理解出来ていない事は確かめたり、他の社員に声をかけたり。僕が何かを変えると、不思議と世界は確かに変わる。些細な事も積み重ねていけば、大きな変化になる。

社員の中に新しい知り合いが生まれ、部長とも話せるようになり、いつもより仕事は速くなって、他の人を手伝えるようになる。すると僕に仕事が少し多めに集まる。信用を得てきたのだ。僕はそれにせいっぱい答える。会社での居場所は、自分で作るのだ。

家ではプログラムの勉強も続けていた。会社の仕事を効率化できるようなモノを組んでみた。試しに使ってみると、なかなか調子がいい。改良を加えていけば、仕事の役に立ちそうだ。上司もそれに評価してくれている。

嬉しい。

僕はそう思うようになった。生きる事は楽しい。もちろん苦しいし、辛いし、悲しいし、ふと眼をやればその先に暗いものは有るの

だけれど、それでも僕は嬉しいと、幸せだと、——そして、生きていたいと願い始めていた。

もう、10月だった。

チ力が、（にいちちゃんはついに僕に本当の名を呼ぶ事を許してくれた）海に行きたいと言った。チ力は海が好きだ。月に一度ぐらいは海に行つたし、夏にもなれば毎週のように泳ぎに行つた。チ力は海が本当に好きで、聞くとところによるとそれは彼女の本当の両親に由来する事らしい。

うつすらと存在する、彼女と両親の記憶——それが、海なんだそうだ。あまりにぼんやりとしたそれは、サンゴ礁の海のように透き通った美しい青だったり、はたまた荒れ狂う岸壁に叩きつけるような波としての海だったり、時にはガラス板で仕切られた人口の海、水族館だったりした。僕はその全ての海を、チ力と共に知った。

その結果、彼女の知っている海は、恐らく冬の冷たい、暗い海だと判った。判つたと言っても特に証拠などはなくて、極端な話、彼女と両親の海の記憶自体、本当かそうでないかも判らない。なのに、

何故か僕は判ったような気がした。

空は灰色にくすんで暗い。それが何処までも続いて、風は強くて寒くてたまらない。潮の香り。目を細めずにはいられない冷たい空氣。打ち寄せる波と飛沫。音は風に消えて聞こえないのに、ただただ休む事無く波の声。寄せて、返して。暴れて、踊って。それをただ茫然と見守るばかりの、小さな僕達。そのどうしようもなく寂しい風景が、妙になじんだ。

チカは今日のような暗く寒い日にも、海に行きたがった。ここに居るだけで少々辛いような、独特のにおいがする風が髪を乱す。波はひたすら冷たく、荒れて叫ぶ。ひどく切ない光景をチカは愛していた。

本人はそれと気付いていないらしいけれど、確かにチカはこの光景を好きなのだ。そして僕はその隣で手を繋いでいる権利を得た。記憶の中で、チカが手を繋いでいる相手は、きっと彼女の両親なのだろう。彼女にとって、悲しくもいとおしい、かけがえのない存在。僕はその場所に立つ事を許されたのだ。

その日も雲は分厚く空を覆っていた。雨が降りそうな鼠色の雲が幾層にもなって流れている。一〇月だというのに、風は妙に生暖かい日で、何か、そう台風の前のような、気持ち悪い感じた。僕達はそんな中を、のろのろと歩いて行く。

砂浜だ。打ち上げられた灌木や海藻、ゴミなどが散乱していて、お世辞にもきれいな浜ではない。少し沖のほうには小島とも大岩ともつかないような塊が、松の木を一本だけ生やして横たわっている。浜は防波堤で守られているらしく、そのまわりはテトラポッドでいっぱいだ。

チカと僕は浜の左、防波堤の辺りに居た。打ち寄せては帰る波を見て、ただ静かに佇んでいた。握った手ばかりが暖かくて、風にさらされている顔は少し冷たかった。

「カンちゃん」

チカが口を開く。

「カンちゃん、最近変わったね」

「そうかな」

「うん、最近のカンちゃん、すごく楽しそう」

「そうかな」

「うん、そうだよ」

「……そっか」

それだけの会話なのに、僕は妙に幸せな気持ちになる。チカもそれで満足ならしく、特に何も言わずに海を見ていた。

僕は今、どうしようもないほど幸せだった。二人の世界は、二人だけの時間は柔らかくて、たまらなかった。ずっとこの時が終わらなければいいなどと、馬鹿らしい事も考えた。何より、今、空は曇っていて、余計な事を考えなくてもすむのだ。

今なら矢は降らない。誰も死なない。もしこの次に晴れるような

事が有れば、大変な事になるけれど……。

僕は、青ざめた。

目の前の空が、雲が、口を開けようとしている。照らし出されたその先に、矢は降り注ぐ。——こつちを向いている。

この浜辺には、僕達しか、居ないのに。

「チ、チ力……」

「ん？」

チ力には矢の事は教えていない。きょんとして僕を見る。僕はその手をぎゅっと握る。

「ちょっと、移動しよう」

「え？」

「いいから」

ぐいつと引つ張って歩き始める。チ力は少し不満そうだったけど、着いて来てくれる。僕の取り越し苦労ならそれでいい。雲が裂けても、矢が降らない事だって確かに有る。

僕はそう考えて心を落ち着かせようとするのに、ここ数日雨だったせいで、雲の間からは既にキラキラと数多の鏝が見えている。チ力は無邪気に「キレイだね」と言ったが、僕は意を決して、チ力を引つ張り走りだした。

ぐいぐいと手を引いて。チ力が文句を言うのも聞こえないふりで僕は必死に走っていた。

その神の矢からは、何人も逃げられない。天と太陽神アポロンの下では、人間はちっぽけでくだらない生き物だ。矢は屋根や壁を突き抜け、どんなに動く標的も逃がさない。時に矢はミサイルのように相手を追尾する。新幹線にだろうと追いつく。地下に居ようと、何処に居ようと、人はその矢から逃げられない。

判っているのに、判っていても、僕は走った。チ力を連れて逃げる。生きたい、と思った。強く強く思った。チ力を死なせたくない、死にたくない、と、チ力と共に生きたいと思った。

防波堤まで来た。いよいよ雲は口を開けて、こちらに矢を向けている。まるで眼でもついているみたいだ。地上でどれほど走っても雲の、空の途方もない大きさの前には、抗いがたい。

少しでも遠くに逃げようと、防波堤に上る。僕には何故だか確信が有った。あの矢は僕らを狙っている。ハッキリと、理由は無いけれど、判る。母さんの時もそうだった。あの日、僕は確かに感じていた。今もそれを感じる。矢は、僕らを狙っている。

チ力のサンダルが脱げてしまった。チ力のはつきりと怒っている。それでも僕は止まらない。止まりたくない。諦められない。僕の、僕達の人生はこれから始まる。あんな矢なんかに、ギリシアの見た事も無い神様に終わらされてたまるか！

ついに雲が口を開ききり、光が僕等を照らし出す。矢がビュンと放たれた。こっちに来るのは一本だ。何秒か有る。僕はもう逃げら

れないと知り、そしてチ力をぎゅっと抱き寄せると、思いつきり海に飛んだ。

テトラポットを越えて、一〇月の冷たい海に、チ力ごと飛び込む。

ドボン、と音を立てて水の中へ。冷たい。それだけでも死にそうだった。でも、矢に決められるぐらいなら、自分で死んだほうがマシだ。暴れるチ力を抱きしめて、水の中に留まる。

ふと上を見た。光が波に揺れて、そういうところは水族館も海も変わらない。僕の切迫した状況も関係無いらしい。波はゆらゆら揺れるばかりで、本来なら心和む光景だろうに、今の僕にはそれが怖くて仕方ない。たぶん、チ力は僕が怖くて仕方ないんだろうけど。

息が苦しくなってきた。このままじゃあ、本当に二人しておぼれ死ぬかもしれないと思った、その時だ。

一際まばゆい光が、海面で弾け飛んだ。光は波に溶けて消える。

まさかと思つて海面から顔を出す。久しぶりの酸素は酷く旨く、そして矢は何処にもない。

そうか、水なんだ。いや、海かも知れない。太陽神の矢は地上に降り注ぐけど、海はなんとかどんという別の神様のものだ。ここには、矢は届かない。

つまり、僕等は逃げ切った。僕等はまだ、生きられる。生きていけるんだ。

僕は嬉しくてたまらなくなった。と、チ力が「カンちゃん!!」

と怒鳴り声をあげる。

「何なの、何なのよ、急に、もう、冷たいし、苦しいし、ぐっしゃぐっしゃだし！」

チカの髪はペツタンコで、化粧はドロドロに落ちている。怒っているチカでさえ何故か愛しくて嬉しくて、僕はいつの間にやらゲラゲラと大声で笑っていた。

「カンちゃん！ カンちゃんってば！ …… 佐藤神威！」

名前で呼ばれたけど、気にならない。確か北海道のなにかの名だ。僕の名前でもある。

「何笑ってんの！ 何で海に入っただの！ 説明しなさいってば！」

怒っていたはずのチカは何故だか笑っていて、僕はもうたまらなくなつて、彼女を抱きしめた。

「僕達、今、生きているんだよ、これから生きていくんだよ！」

チカはきょとんとしたけれど、やがて「そうだね」と笑ってくれた。

僕は今、最高に幸せだ。

矢から逃れた僕達は、これからどうなるんだろう。またいつか狙われるのか、それとももう死なない体にでもなっただろうか。なにもかも判らない。たくさんの事が、人間には未だに判らない。

ただ、この憂き世に注ぐ一条の光が有るなら。

それは人の死と、人の生きる力を、全ての物に与えているのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9896h/>

この憂き世に注ぐ一条の光が有るなら。

2010年10月15日20時21分発行